都道府県別賞一等

家族の愛の備え

沖縄県　沖縄尚学高等学校附属中学校　一学年

島袋　紗希

「うちは生命保険には入っていないよ。」夏休みの宿題で生命保険についての作文を書くことになり、私は何気なく母に尋ねた。テレビのコマーシャルでは毎日あんなに生命保険の大切さが叫ばれているのに、わが家は入っていないと知り、私は急に将来が不安になった。もし、親の身に何かが起きたら、私たちの生活や私の進学はどうなってしまうのだろう。しかし、不安そうな私を見て、母は言葉を続けた。「でもね、お母さんは病気のときの医療保険に入っているし、あなたのための学資を準備する保険にもちゃんと入っているから大丈夫だよ。」その言葉を聞いて、私はホッとすると同時に、一つの疑問が湧いた。医療保険や学資準備のための保険は、生命保険とはどう違うのだろうか。私は、わが家の備えの仕組みについて自分で詳しく調べてみることにした。

本やインターネットで調べてみると、実は医療保険も学資準備のための保険も、全て「生命保険」という大きな仕組みの仲間なのだと知った。生命保険には、亡くなったときに備えるものだけでなく、病気やケガの治療費に備えるもの、子どもの教育資金を準備するものなど、たくさんの種類がある。さらに調べていくうちに、日本には「遺族年金」という、万が一働き手が亡くなったとしても国から遺された家族にお金が支給される手厚い仕組みがあることも分かった。だからわが家は、毎月高いお金を払って大きな死亡保険に入る必要がなかったのだ。その代わり、親が急な入院をしたときの費用をカバーする医療保険と、私が将来高校や大学に進学するための学資を準備する保険の二つを、私が生まれたときから欠かさず準備してくれていたのだと気づいた。

これらを理解したとき、私の不安は消え去り、胸がじわっと温かくなった。親は、むやみに全ての保険に入るのではなく、国の仕組みを賢く利用しながら、本当に必要な生命保険だけを見極めていた。親自身の健康を守る医療保険も、私の未来を守る学資準備のための保険も、すべては「わが家の安心」につながっている。

テレビで見るような大きな死亡保険はなくても、ここには確かな〝家族の愛の備え〟がしっかりと存在していた。それまで私にとって生命保険とは、大人が入る難しい義務のようなものだと思っていた。しかし、自分で調べ、親の選択の理由を知ったことでイメージが変わった。生命保険とは単なるお金の契約ではなく、『大切な人の今と未来を守りたい。』という願いを形にしたものなのだ。

親が生命保険を通して私に贈ってくれたものは、お金だけではない。どんな未来が来ても大丈夫だという〝安心〟と、自分の信じる道を進みなさいという〝エール〟だ。私は今、こうして当たり前のように学校に通い、将来の夢を描けている日常に心から感謝したい。そして、親が守ってくれている自分の未来に向かって、一歩ずつ全力で努力していこうと思う。